

Bangladeshへのスタディ・ツアーを通しての学生の価値変容

三宅博之
(法学部政策科学科)

キーワード

価値変容 Bangladesh スタディ・ツアー 国際理解 ESD (持続可能な開発のための教育)

グローバル化が進む中、日本の大学生も国際理解力を向上させる必要性に迫られている。その一つ的手段としてスタディ・ツアーがある。Bangladeshはかつて最貧国と呼ばれていたものの、近年、経済や社会の変化は目を見張るものがある。しかし、今でもインフォーマルセクターに働く人々は多い。様々な意味でBangladeshはスタディ・ツアーの魅力を提供してくれる。今回、Bangladeshにスタディ・ツアーへと出かけた学生はBangladeshの魅力を発見し、ある意味価値変容を遂げている。スタディ・ツアーの中で学生がどのようにBangladeshをとらえ、国際理解力を増したのかを記した。

はじめに

2005年から始まった「国連持続可能な開発のための教育の10年 (UN Decade of Education for Sustainable Development)」が今年の2014年に終了した。ユネスコは、ESDのGlobal Action Programを引き続き実施することを決定している。ここで言うESDとは、環境、経済、社会のバランスがうまくとれた持続可能な開発を実現するために必要な教育・学習を指す。具体的には、平和教育、人権教育、環境教育、国際理解教育、福祉教育、多文化教育などを含むすべての学習領域であり、参加型・実践重視型手法に重点が置かれ、結果として知識の吸収だけでなく態度・行動変容を引き起こし、社会をより良い方向に改善していくことが目的とされている。

ユネスコが持続可能性を阻害する諸要因の解決を目指すために提示しているテーマとして、貧困の克服、ジェンダーの平等、(心身の)健康の増進、環境保護、地方(農村)の発展、人権、異文化間の理解と平和、持続可能な生産と消費、文化的多様性、生物多様性、ICT情報通信技

術を挙げているが、大島弘和と伊井直比呂は、それらを鳥瞰した人類社会として、①人間の物質的豊かさを第一とするのではなく、②すべての命がつながり続け、③人と自然とのつながりのある社会であり、④人を育むすべての文化が深まり続ける中での相互尊重と経緯、⑤責任ある生産者や生活者の姿が見えるような社会であり、それらを達成するような人間像の育成が求められると言っている（大島弘和・伊井直比呂 2012年6月：83-84）。

本稿では、このESDの視点に立脚し、2014年9月に実施したバングラデシュへのスタディ・ツアーを通して学生たちがどのように価値変容したのかを事前、事後に行ったアンケート調査を通して検証したい¹。同時に、価値変容が起きているならば、そのような結果に導いたバングラデシュが持つ特徴にも言及したい。海外へのスタディ・ツアーは国際理解教育の中でほとんどが取り扱われているので、最初に国際理解教育の概念説明を行い、そのあと、スタディ・ツアーの内容説明、バングラデシュの特徴、さらにはスタディ・ツアーに参加した学生たちの質問票への回答の内容と分析などを記したい。

第1章 国際理解教育や開発教育に見るフィールド体験の重要性

第1節 国際理解教育や開発教育に見る教育内容と方法

近年、文部科学省は、「グローバル人材育成推進事業」を積極的に推進しようとしている。その目的とは、マスコミでよく言われている最近の「若い世代の『内向き志向』を克服し、国際的な産業競争力の向上や国と国の絆の強化の基盤として、グローバルな舞台に積極的に挑戦し活躍できる『人財』の育成を図るため、大学教育のグローバル化を推進する取組を行う事業に対して、重点的に財政支援すること」であるとしている。そして、「グローバル人材育成推進会議 中間まとめ」によれば、グローバル人材には、*語学力・コミュニケーション能力、*主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、*異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティーの三要素に加え、今後の社会の中核を支える人材に共通して求められる、幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークとリーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等の能力の獲得が必要となるとされ、そのような大学教育のグローバル化を各大学で推進する取組を展開してほしいとされている（<http://www.jsrs.go.jp/j-gjinzai/gaiyou.html> 2014年12月2日アクセス）。

本学も同事業を実施しており、一年次のスタートアッププログラムで基礎力をつけ、2年次以降、英語力・目的別コース、すなわち、副専攻としてのGlobal Education Programの中にGlobal Business Course（TOEIC：860点）、Global Studies Course（TOEIC：800点）が、他に、Global Standard Program（TOEIC：730点）、Career English Programが設けられ、

進むことになっている。大学での語学能力や国際事情に関する知識を得た後、既存の交換留学、派遣留学制度や短期語学研修を活用し、海外での学習・生活体験を可能としている。これは、従来から言われている国際理解教育、中でも語学力に力点を置いた教育である。

そもそも、この国際理解という語が出てきた背景は次のようなものである。日本の国際化は1980年代後半から加速的に進行し、将来の日本を背負う若者に国際理解力を涵養する必要性を文部科学省が感じ、中学校では1993年（平成4年）に、高等学校では1994年（平成5年）に改訂された学習指導要領であると言われている。具体的な改訂の特徴としては、コミュニケーション能力と積極的な態度の育成にあることは指摘されている通りだが、文化的側面をかなり強調し、一方的な相手の理解ではなく、相互交渉による国際理解の基礎となるような言語教育、すなわち外国語の教育が求められている。コミュニケーション能力の重視、時代の変化、英語のステータスの変化、国際理解教育の導入が原因であるとされる（佐野正之・水落一郎・鈴木龍一 1995：101）。

以降、国際理解という言葉は定着したが、同時に開発教育という言葉も現れるようになった。では、開発教育がどのような内容と方法で実行されるのかといえば、次のようなことである。

開発教育協議会の定義によれば、多様性の尊重（開発を考えるうえで人間の尊厳性を前提とし、世界の文化の多様性を理解すること）、開発問題の現状と原因（地球社会の各地にみられる貧困や南北格差の現状を知り、その原因を理解すること）、地球的課題の関連性（開発をめぐる問題と環境破壊などの地球的諸課題との密接な関連を理解すること）、世界と私たちのつながり（世界のつながりの構造を理解し、開発をめぐる問題と私たち自身との深いかかわりに気づくこと）、私たちの取り組み（開発をめぐる問題を克服するための努力や試みを知り、参加できる能力と態度を養うこと）を学習内容として、さらに、学習方法としてはすでに定着しているグループワークやワークショップに象徴される参加型学習の理念や手法とされ、具体的には、ブレインストーミング、ランキング、フォトランゲージ、シミュレーション、ロールプレイ、プランニング、タイムラインがあげられている（湯本浩之 2010：7-8）。

しかし、ここでの参加型手法には環境教育が重視する五感を使うという観点が重視されていない。ネイチャーゲームの礎を作ったコーネルは、子どもたちへの環境教育として最重視している「体験第一、解説は二の次に」の理由に「子どもたちが動物や植物の名前を覚えないうって心配するのはばかげたことです。名はうわべだけのラベルであって、本物の姿ではありえないのです。ナラという名前から木の特徴がわかるわけではありません。木を深く知るには1日の光の変化の中で木がどのような変化を見せるかを観察したり、ふだんとは違った角度から観察したりする必要」があるとして、子どもたちの自然に対する感受性を豊かに育てるためにはまず自然を学ぶことが子供たちを魅了し、夢中にさせてしまうようではなければならない、その結果、最終的に

ネイチャーゲームを考えだしている。ただおもしろいだけでなく、子どもたちひとりひとりの体験＝感動的な「発見」を基礎にするものでなければならないとして、そのために五感を使い、想像力をはたらかせ、この世界をさらに深く理解し、その尊さに気づくような内容や方法を考え出している（ジョセフ・B・コーネル著 吉田正人・辻淑子・品田みずほ訳 2009：8）。

第2節 国際理解教育や開発教育におけるスタディ・ツアーの位置づけ

第1節では詳しく述べる事ができなかったが、国際理解教育や開発教育の参加型手法として重視されるのがフィールドワーク、すなわち、現場に出かけ、その場でネイチャーゲームをはじめとする様々な手法を用いて学習するというスタディ・ツアーである。スタディ・ツアーと一語で言うものの、企画・実施にこぎつけるためには数多くの難題をクリアしなければならない。本節ではスタディ・ツアーの参加型学習方法としての教育的意義を述べ、そのあと、企画や実施にあたりどのような点に留意しなければならないかを述べたい。

まず、スタディ・ツアーが大学に非常に広範囲に取り入れられたのは、シティズンシップ教育や開発教育など実務教育色が濃い科目の担い手として、1990年代以降、NGO活動家やJICAなど国際協力活動の経験者、開発教育や国際理解教育の専門家が教員として採用され、フィールドワークや開発問題、国際支援の専門内容だけではなく、カリキュラムとして、教育の専門家による学びの獲得や学習変容論が課題になってきたからである（藤原孝章・栗山丈弘 2014年6月：47）

次に、参加型学習手法をとるスタディ・ツアーの教育的意義に触れたい。前出の藤原と栗山は、スタディ・ツアーが国際理解教育として成立するためには、「海外での非日常的な体験」を参加者の学びにつなげていく学習方法の必要性を強調し、プログラムを作る上で場面やきっかけと参加型の学びの関係を適切に考慮に入れることの必要性も重要であると述べている。そのためには、開発や環境、人間や平和などの地球的課題、人々との交流といった、国際理解に係るコンテンツ（学習内容）だけではなく、事後の省察も含めた、参加者の学びの変容をはかる評価規準（到達目標）も求められるわけである（藤原孝章・栗山丈弘 2014年6月：48）。

最終的には学生の国際理解評価によってその意義や目標達成が測定される。その評価の際には3つの留意点、つまり、*異文化についての情報をどれだけ正確に習得したか？ *異なる価値観を理解し、自己中心の発想からどれだけ脱却できたか？ *積極的に、かつ効果的にコミュニケーションできたか？（佐野正之・水落一朗・鈴木龍一 1995：111）である。これらの基準でもって第3章では今回のスタディ・ツアーの目標への到達度の測定を行った。

第2章 スタディ・ツアーの対象国 バングラデシュ及び首都ダカという街

第1節 近年の途上国の都市の変貌

スタディ・ツアーをより興味深いものにするにあたっては訪問国や地域に歴史、社会、文化や自然といった様々な分野にどのような資源があるかが非常に重要である。今回のスタディ・ツアーにはバングラデシュを選んだわけであるが、南アジア7か国（インド、パキスタン、バングラデシュ、ブータン、ネパール、スリランカとモルディブ）の中で旅行者のバイブルとも言われている『地球の歩き方』のバングラデシュ編が2010年ようやく刊行されたという事実に見られるようにバングラデシュ自体は旅行者をひきつける観光資源をほとんど有していない。現在、日本からの直行便を持たないため、バングラデシュに行くためにはバンコク、クアラルンプール、シンガポール、昆明、香港、デリーを経由しなければならない。観光大国である隣のインドとは大違いである。数は少ないものの、バングラデシュとは、さらには首都ダカとは旅行者にとってどのように映るのかを見てみよう。

バングラデシュは紛れもない途上国であるが、近年の首都ダカの都市景観の変貌ぶりは非常に顕著である。先進諸国における都市の再編と並行して、途上国の都市も大きな変化を遂げ、その変化を人口増加と急速な産業化に求め、都市化率の急激な上昇を引き起こした。その要因として、第一に中央政府による大規模な工業政策の遂行、国家財政が特定の地域および都市へと集中的に投入され、公企業の設立や道路・電力といった産業インフラストラクチャーの形成が大規模に行われたこと、第二は、多国籍企業に代表される外国企業の進出であり、途上国の都市が世界経済のネットワークに直接組み込まれ、その末端活動を担いうる都市基盤の整備が見られた、ただし、一方では産業化による雇用機会の創出が不十分であったにもかかわらず、都市への流入はあとを絶たず、かれらの就業機会は限られ、最低限の生活を維持するために「不法に」占拠したスラムに居住し、膨大な労働力リザーブを形成することになると伊豫谷は1990年代初頭に説明している（伊豫谷登士翁 1993：10-11）。現在、そのように誕生・成長してきた途上国の諸都市は、インフラも以前に比べかなり整備されてきている。しかしながら、都市の人口増加が続いているため、インフラ整備が増加人口の伸びにまだまだ追いつかないといった問題も抱えている。したがって、都市の近代的な産業が飛躍的に伸び、貧困率は少し減少したものの、貧富の格差は増えていると言える。バングラデシュのダカもそのような都市のひとつである。

第2節 バングラデシュと首都ダカの変化

バングラデシュといえば、1970年代や80年代は自然災害と貧困が代名詞であり、そのために

主に農村からの移動によりダカの人口が急増した。その急増ぶりは他の地方都市の増加率を圧倒するものである。したがって、2012年にはダカ市の行政を南北に分け、新たに北ダカ市と南ダカ市となった。

経済面に眼を転じると、近年、ユニクロが2008年にバングラデシュに進出し、グラミン銀行との共同で設立したグラミン・ユニクロから自社ブランド製品を調達しだした事実に見られるように、縫製業を中心とする製造業の伸びが著しい。国内総生産に占める製造業の割合は2000年代半ばに農林業を上回っており、輸出の95%は工業製品である。最近では新産業が台頭している。造船業、医薬品、自転車などの軽工業、IT産業、農産物加工やスーパーマーケットに代表される小売業などである（山形辰史・村山真弓編 2015年1月：2-26）。日本貿易振興機構・アジア経済研究所で長年バングラデシュ研究に携わっている山形と村山は、「これまで最貧国、自然災害のデパート、援助の『底なしバスケット』などと揶揄され続けてきた。その国に大きな産業化の波が及びつつある」とバングラデシュの変化を強調している（山形・村山 2015：2）。

しかし、マクロな経済成長は続いているものの、それらを取り巻く環境を見れば、悲観的にもなる。好例が人口増加による様々な波紋である。例えば、ダカの人口推計に関する国連の報告書（世界における都市人口2014年改訂版）を分析して、Daily Star新聞は次のように述べている。ダカは世界で11番目の大都市となり、年3.6%の割合で増加している。交通混雑や洪水が日常的な問題になっており、現在の1700万の人口は住居、健康、電気やきれいな水といったような基本的な必要物が剥奪されている。2030年には6番目の巨大都市になり、人口も2700万人を抱えることが予測されている。著名な都市計画家であるジャミルル・レザ・チョウドリ教授はこのままの人口増加が続けば、ダカは持ちこたえられない。その証拠として、現に既存の交通渋滞や洪水は過剰人口の結果であると述べている（<http://www.thedailystar.net/rising-population-big-concern-for-dhaka-33081> 2015年1月15日アクセス）。

第3節 ベテラン写真ルポライターと研究者が見たベンガル地方

途上国の変貌ぶりは上記の説明である程度理解できるが、では、バングラデシュ、さらに首都ダカの印象は外国人観光客はいかなるものか？二人の意見を紹介しよう。一人目は、世界を旅し、その印象をネットに書き込んでいる人物である。今回のバングラデシュの訪問で74か国目であるという。少し長くなるが、その特徴を的確にとらえているので引用しよう。

携帯の盗難という目にあったがバングラデシュは本当に良い国だと思う。人が信じられないくらいに親切かつ友好的だ。本当にこの国には外国人旅行者が皆無で十日この国を旅して結局日本人はおろか一人も外国人の姿を見ることは無かった。好奇心旺盛なこの国の人たちは全く一人にしてく

れることなく次から次へと声をかけてくる。最初英語が通じないと思ったが実際には5人に1人位は片言でも英語が話せるので何とかコミュニケーションが取れる。お茶をご馳走になったり食事をご馳走になったことも結構な数になる。そして食事が抜群においしい。バングラデシュも元はインドから独立した国なのでインド料理なのだが自分にはこちらの方が合うようだ。特にピリヤニやキチュリといったご飯料理が日本の五目ご飯やドライカレーのようでおいしい。またイリッシュという国魚が名物でフライや煮込み焼魚として食べられる。これも日本的。日本人には大変馴染みやすい味が多い。しかも一食100タカもあればかなり豪華な食事ができてしまう。また今はマンゴーが旬で世界一の市場といわれるラッシャイ地方（ラージシャヒ地方：筆者注）では町中にマンゴーが並び1キロ50タカという安い値段で買える。見た目緑ですっぽさうだが中はジューシーで抜群に甘い。正直観光資源としては遺跡などはあるがインドやカンボジアのアンコール遺跡などを見ていると地味と感じるがこの人との交流と食事と素朴な風景で今まで訪れた国の中で一番良かった国はと聞かれればバングラデシュと答えると思えるほどユニークな国だ（<http://blog.livedoor.jp/yamusicnifty/archives/874428.html> 2015年1月26日アクセス）。

次に紹介するのは、開発教育研究で著名な田中治彦立教大学教授の Kolkata（インド）の印象である。同教授の場合、仕事上途上国への旅の経験がかなりの数あると思うが、バングラデシュ、その隣国インドへの印象は格別強烈であったことが下記の印象記よりわかる。ちなみに、Kolkataはインドの西ベンガル州の州都であり、1947年インドと東パキスタン（現在のバングラデシュ）に分離独立する以前は、現在の西ベンガル州と現在のバングラデシュはイギリス領インドにおいて同じベンガル州であった。したがって、同じベンガル人が居住する Kolkata と Dhaka は姉妹都市と言っても過言ではない。

突然、ベンガル旅行に戻って恐縮であるが、Kolkata（現在の Kolkata：筆者注）空港に着いたときのことである。空港からホテルまでは車で30分ほどかかるのでタクシーを利用する。ガイドブックにはプリ・ペイドタクシーならば値段がわかるので安心、と書いてあった。入管を出ると一人の男の人が寄ってきた。ホテルまでタクシーがありますよ、と言う。そこで値段を聞くと390ルピア（約1200円）（「ルピー」の間違い。「ルピア」はインドネシアの通貨：筆者注）。着いたばかりで物価がわからないが、まずは値切るべきと思い、「高い。まけてくれ」といった。すると、その運転手は「私はプリ・ペイドだ。ここに公式の値段表がある。」と一紙の紙を見せてくれた。これなら安心と思い、ホテルまで利用した。

ところが、後からガイドブックを見なおしてみると「空港から市内までは130～160ルピアが適当」と書いてあるではないか。やられた！最終日、ホテルから空港までタクシーを利用する。すでにレートは知っているから交渉には自信がある。頭にターバンを巻いたおじさんに「空港までいくらですか」と聞くと、「250ルピア」との返事。「私は来たときには130ルピア払った。それしか払えない」と

いうと、「深夜は帰りの客がないので割増しなのだ」と答える。私は「それはあなたの勝手だ」と言う。「ちょっと待ってくれ。この界限では深夜のタクシーは皆ホテルと契約していて、つかまえることができないし、皆割増し料金だ。」

ああ言えば、こう言う。こう言えば、ああ言う。最後は自分の家族の話まで持出して泣き落としにきた。お腹はPで体調不良だったし、早くこの国から逃げたいと思っていたので、無条件降服した。インド人には完敗だ、私はインドでは商売できない。バングラデシュでもインドでも南アジアのNGOと交渉するには、タクシーの値段交渉と同じことをしなくてはならないのだ。相手が信用できるかどうか、言ってきたプロジェクト費は適切かどうか。1 言えば10答える相手に援助金を1円でも値切ることができるだろうか。たとえ体調万全でも、私にはできそうもない。大阪商人的感覚の持ち主だけがインド大陸でNGO活動ができるであろう。それでは、気が弱くてタクシーを値切ることができない人は、草の根援助には関われないのか。いや、そんなことはないはずだ。いよいよ最後の手段の登場である。カルカッタのタクシーの話はすでにした。他に話すことはあまりない。カルカッタでは、タクシーにぼられた。寺院のガイドにぼられた。みやげ物屋でぼられた。ひどい下痢におそわれた。下痢は2週間続いた。おそるべしインド。バングラデシュとカルカッタに行って「ベンガル制覇」をねらっていた自分があさはかであった。インドは観光客としてのこのこやってきて太刀打ちできるようなところではないのだ。インドの壁にはねかえされた思いである (<http://www.rikkyo.ne.jp/~htanaka/01/Bengal05.html> 2014年12月29日アクセス)。

双方ともベンガルの特徴を物語っている²。前者は観光客を呼ぶために観光資源を作り上げるでもなく、ごく自然で素朴なベンガルの農村風景に魅了されているのである。その中に人懐っこいベンガル人との交流を楽しみ、食事のおいしさへの驚きに加わっている。ここには自然とした癒しが存在するのである。他方、コルカタのタクシー乗車での運転手との交渉は運賃メータに慣れている人々にとって不慣れな交流の場を提供してくれる。コミュニケーション能力や交渉力を上げる絶好の機会なのである。そのようにポジティブ・シンキングで行くことで南アジアをもっと楽しむことができる。南アジア研究者の大半がこの洗礼を受けている。特に、コルカタはベンガル州にあるものの、タクシーの運転手は非ベンガル人が多い。実は、ベンガル人であるコルカタ市民も閉口していることを理解しておく必要がある。また、「ボラレル」=損害を被るという事件に対するある種の危機管理能力を涵養できる場としても位置付けることができる。これこそが日本の生活では体験できない「非日常生活」の証しである。

以上のようにインドやバングラデシュに対するある種の価値観が渡航経験を通して形成されるわけであるが、では、観光客として出かけた学生たちはバングラデシュやダカをどのように把握したのであろうか、そのことを次章で問いたい。

第3章 スタディ・ツアーを通しての学生の国際理解能力の向上と Bangladesh への見方の変化

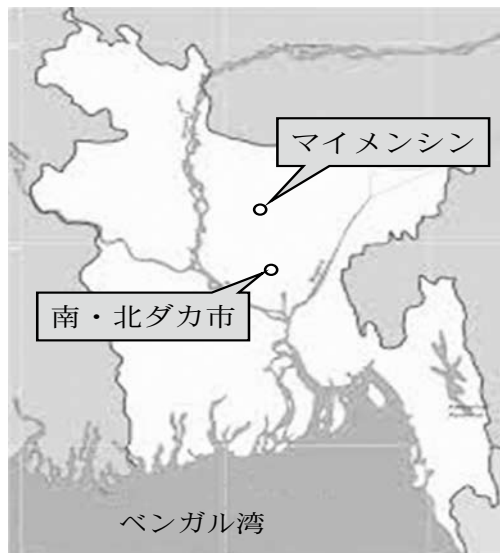
本章では筆者とともに6人の学生が2014年9月1日から12日まで Bangladesh に出かけたスタディ・ツアーを通して「非日常生活」に身を置きつつ、価値変容がどのように達成されたかを調べた。それにあってアンケート調査の質問に対する回答を紹介し、〔解説〕の中で簡単な分析を行った。

第1節 スタディ・ツアーの目的と内容

これまで章では Bangladesh の概要ならびに日本人旅行者の Bangladesh やダカへの印象を記してきた。今回学生と出かけたツアーの目的を大別すれば、*うわさで判断するのではなく、実際に現場を訪れ、自らの観察やインタビュー、さらには5感を通じて Bangladesh、ダカを理解する、*国際会議の雰囲気を感じ、同時に自らの英語力を知る、*国際協力分野で日本人を通じて海外で働くことの意味を理解する になる。訪問先とその内容は以下の通りである。

*開発途上国の現状理解として、

- ・ダカ市内見学・観察(街、市場、ショッピングセンターなど)→ Bangladesh の人々の生活を観察し、特に環境分野でどのような問題が存在するのかを理解する。
- ・国立博物館、ダカ大学構内を見学
→国立博物館 Bangladesh の文化や歴史を学ぶ。さらに、ダカ大学の構内を巡り、大学キャンパスの造りや歴史、大学生活を知る。
- ・ Bangladesh 人の中流階層の家庭(ルバ=九州工業大学大学院博士課程修了者の実家)への訪問→ Bangladesh 人の中流階層家庭の一般的な暮らしぶりを見学し、 Bangladesh 人の生活様式や文化を理解する。
- ・マイメンシン農業大学での訪問日本人学生への特別授業→マイメン



シン農業大学の設立経緯や実態などについて知る。

- ・マイメンシン市の環境NGOのコンポスト生産の見学→バングラデシュでの生ゴミの処理がどのように行われているのかを視察する。
- ・地球温暖化ガス測定圃場見学（千葉大学との共同）→千葉大学との共同で行われている地球温暖化ガス測定圃場を見学し、その研究がどのように活用されているかを知る。
- ・環境配慮型養魚業見学→バングラデシュの養殖の現状、そしてどのように環境配慮がなされているかを見学する。
- ・ダカ大学の学生と共にダカ市内を見学→ダカ大学の学生との国際交流を通して、文化を学びながら、バングラデシュの大学生の生活について知る。
- ・小規模工場（台所・洗面所・風呂の蛇口生産・メッキ工程）→南ダカ市にある小規模工場を見学し、現状を知る。
- ・サファリパーク見学→バングラデシュのサファリパークの実態を知る。

*国際協力の現場視察として、

- ・国際協力の現場視察→青年海外協力隊員とともに、廃棄物管理ワード事務所や清掃労働者コロニー、最終処分場を周り、国際協力の現場を視察し、その現状や課題について知る。
- ・JICA専門家によるダカ市廃棄物管理キャパシティ・デベロップメント事業の過程・結果に関する講義を受けること（JICAバングラデシュ事務所）→八千代エンジニアリング株式会社の石井氏が携っているダカ廃棄物管理キャパシティ・デベロップメント事業に関する講義を受け、ダカの廃棄物管理について理解を深める。
- ・在バングラデシュ日本大使館への訪問→進藤康治政務班長との会談を通して、外交官の職務について知る

*国際会議への参加

- ・国際会議（ダカ大学）への参加→バングラデシュの環境に関する国際会議（International Conference on Environmental Aspects of Bangladesh & Asia 2015）に参加することにより、普段の大学生活には入ってこない国際会議の雰囲気味わうと同時に、各大学の関係者（教員・大学院生）がバングラデシュの環境について、どのような研究をしているのかを知る。

第2節 アンケート調査の結果と解説

スタディ・ツアーに関して時系列にアンケート調査を4回行った。1回目はホテル到着直後、2回目は廃棄物処理作業の見学直後、3回目はバングラデシュを離れて北京の空港にて、最後は、4か月経って日常生活に舞い戻ったところである。それらから発見できたことを紹介したい。

1. ①空港からホテル到着までの車窓から眺めた印象と②研修を終えてのバングラデシュのダカの印象を漢字一字でそれぞれ表すといった質問に対しての回答は、①（騒、人、賑、騒、混、群）から②（残、進、多、活）へと変化している。

解説：当初の印象は、車窓からいかに車や人の数が多いのかに圧倒され、数量の多大きとその若干の否定的な感情・圧倒される感情をあらわす漢字であるが、最終的には「進」や「活」に見られるように多大きさを肯定的に捉えている。「残」はここを離れたくない、もっとここに過ごしたいという意味である。後者については四人分しか記入されており、あとの二人は未記入の状態だった。

2. 「今いるホテルの環境も含めてバングラデシュで印象的、目に留まったことを3つ書く」との質問に対しての回答は、(女1)・様々な乗り物と様々な格好の人々がいた。・目が合うと笑顔で返してくれる人々が多い。・ご飯はすべて辛い。(女2)・人々がこちらを興味深そうに見ている。・ゲストを最大限でおもてなしする。・腕や脚がない人がかなりいたこと。(女3)・人々はとても優しい感じ。・リキシャ、歩行者などで道路は溢れていた。・空港からの道が意外ときれいだ。

(男1)・外国人が珍しいのか、じっと見られた。・日本では見られないほど交通量が多く、クラクションが鳴っていた。・バングラデシュの家庭で受けたおもてなしの数々と優しさ。(男2)・ラッシュ時の人、車、リキシャの多さ。・空港職員の仕事の態度がよくも悪くも途上国らしい。・どこから来たのかと聞かれ、「日本から」と答えると必ず笑顔になって「よい国」だとほめてくれる。(男3)・道路に白線がなく、人や人力車、車がルールなく動いている。・ゴミを捨てる場がなく、あちこちに散在している。・人々が優しく陽気である。

解説：この質問は1-①と同時にに行った調査の別項目で、観察力を問う質問である。人や車の多さ・騒々しさを記しているが、人々の様子になると笑顔や優しさ、空港職員や途中で立ち寄った筆者の知人宅で接した人々の親切さ・親日感などにある程度感動し、すでにバングラデシュ社会へのいい意味での溶け込みの一端を示す表現が使用されている。

3. 今回のスタディ・ツアーを受け身の姿勢で捉えさせないようにするために各自に課題を設定させ、その課題の学習方法も同時に記させた。回答は、(女1) 課題：バングラデシュの人々の服装の素材、方法：違う種類の服を着ている人それぞれに聞き取り調査、(女2) 課題：家庭ごみの処理について、方法：ごみ処分場を見てどのような種類のごみがあるかを観察すると同時に家庭に行く機会があれば、その処分法を尋ねる。(女3) 課題：バングラデシュが直面している問題を詳しく知ること、方法：JICA職員など、バングラデシュで活動して

いる日本人と話をしたり、説明を聞く機会があるので、その際に積極的に質問をする。

男子学生の場合、(男1) 課題：ダカの交通事情、方法：ただ車が多いだけでなく、車線のあいまいさ、信号の有無、車だけではないことなど、日本と異なる部分を中心に調べる。(男2) 課題：ダカの交通事情、方法：・距離と時間をまとめる(それぞれの移動の際に)、・一定時間の間に車、リキシャが何台通るかの計測。(男3) 課題：ダカ市内の交通事情、方法：予想以上に車、人力車、人の流れが速く、また、人も多いため、周りに妨害されずにすむ場所を確保し、*車・バス、*リキシャ、*人を分類・計測し、交通事情を考える であった。

解説：男子学生は、日本と異なる最初の印象が強烈だったため、全員が交通事情を選んでいるのが特徴である。ちなみに、この課題に対する成果物は、北九州市立大学法学部政策科学科三宅ゼミ発行の『2014年度バングラデシュ研修成果報告書』(2015年1月)に収められている。

4. 質問「バングラデシュの旅を通して自らどのようなものやことを変えたいか？」に対する回答は、(女1) 視野を広げたい、考え方をもっとグローバルに。(女2) 途上国に対する固定観念をなくす。(女3) 飛行機の中や現地であつた人と話すときにうまく自分が言いたいことを言えなかったり、相手が伝えたいことがわからなかったりなど、英語でのコミュニケーションが全くできないので、もっと、英語への意識を高めていきたい。

また、男子学生の場合、(男1) 途上国というイメージだけで怖い、危ないなど判断するのではなく、実際にバングラデシュに来てみて自らがどう思うのかを考えたい。(男2) 将来、途上国で働く機会を得られた際に、どのような働き方をするのか、こちらで会う日本人を参考にイメージを描けるようにしたい。(男3) バングラデシュに対する見方を変えたい。今は外見上のバングラデシュしか見る事ができていないので、人々の話や生活を見聞し、考えていきたい。

上記質問とほぼ内容が重なるところがある「バングラデシュの旅に何を期待するか？」という質問への回答は、(女1) 自らの成長、(女2) バングラデシュの人々の生活を見て(五感を使い)、自分たちとはどこがどのように違うのかを考え、課題や解決法を見ていきたい。(女3) ・日本にはないものを見て、触れて、体験したりして、自分の視野を広げたい。・バングラデシュの人と友達になりたい。何かを得て、成長して帰れるような旅にしたい。(男1) 日本で生活しているだけでは感じる事の出来ないこと、体験できないこと、見ることができないもの一つでも多く出会いたい。(男2) ・予測不可能性が生み出す楽しさ、・途上国ならではの活気、・働いている人々(JICAなど)のたくましさ、この3点をしっかり

り見て感じておきたい。(男3) 新しい価値観、刺激、自らが今後、仕事上でも考える水問題についても何か情報を得たい、であった。

解説：ここから見られるのは次の3点である。まず、現場に出かける意味を十分理解していることである。全員が政策科学科に属しているため、ガバナンスの重要性を理解しており、課題を発見するにあたって人々が生活する現場に足を踏み入れ、観察やインタビューをする必要性を痛切に感じていることがあげられる。それによって、マスコミや我々研究者が結果として作り上げてしまったバングラデシュやダカへのステレオタイプの像や印象を払拭したいと考えている。次は、英語というコミュニケーションの媒体手段を磨くだけでなく、それを含めたさらに広い概念のコミュニケーション能力を身につけたいことである。最後は、男子学生(男2と男3)に見られるが、自らの職業との関連性の視点で今回のツアーでの成長、ツアーへの期待をとらえていることである。男子学生全員が4年生ですでに就職が決まっている。二人は海外勤務を希望しているため、そのような回答が出てきたものと思われる。

次にあげる2つの質問は、筆者が自らの研究(廃棄物管理における社会配慮的視点のあり方)で扱っている廃棄物処理現場の視察を通じてのものである。

5. 「南ダカ市のサイダバド地区にあるZone 5の事務所に行き、清掃労働者コロニーとスラムを見ましたが、どう感じたか？」との質問に対して、(女1) この事務所ではクリーナー(清掃労働者)の管理がゾーンやワードによって組織化されていることがわかりました。また、管理の仕方はワード(区)のインスペクター(清掃管理官)によって異なっていることを知り、何か基準となるもの(統一観)を設けたらよいなと感じました。クリーナーコロニーは思っていたよりも(裏は汚かったが)、きれいだったように思う。(女2) クリーナーコロニーも、スラムももっと暗い街というのを想像していたが、実際は、人々の表情も明るく、食べ物、テレビもたくさんある状態だったので驚いた。クリーナーコロニーの周りを見つみると、掃除の仕事をしている人々たちにもかかわらず、家の裏側は窓から投げられたゴミで溢れていたが、人々の習慣を変えるのは簡単なことではないなと思った。(女3) 思っていたより多くの人々がいて驚いた。笑顔がステキだった。クリーナーコロニーでは窓の下にあった側溝が汚くてクリーナーの意識から変える必要があると思った。もう一度視察に出かけたいと思っている。

男子学生の場合、(男1) 事務所は質素な造りだったが、その場所が大きな役割をしているということを知った。インスペクターの人も熱心に説明してくれ、クリーナーも想像以上に働きやすい環境が整備していることに驚いた。コロニーは住居用建物が環境整備され

ているのに、ごみが散乱しているのは非常に残念だ。(男2) クリーナーコロニーもスラムも思っていたよりきれいで、生活環境が整っている感じがしました。ただ、クリーナーたちのコロニーであっても、ポイ捨てによって側溝の中まで深くごみが溜まっていた。このポイ捨てをなくすことができれば、もっと衛生面も向上していくのではと感じました。(男3) まず、クリーナーコロニーは想像していたよりも環境が良かった。平屋だと思っていたのですが、日本の集合団地のようになっており、生活もテレビ、冷蔵庫と揃っていて、バングラデシュでは比較的裕福な生活だと思いました。スラムに関して、インフラは下水道を除いてしっかりしており、建物の質は落ちるけれど、十分に生活できる環境だと思いました。

解説：上記の回答から、ほぼ全員が想像以上の居住環境の良さをあげている。清掃員とウェストピッカーを同一視しているのであろうか。清掃労働者は市の雇用者なので、ある程度の安定した収入は得ることができる。ただ、アパートの背後には窓からのポイ捨てのゴミが集積しており、清掃労働者であればこそ、自らの周囲は手入れが行き届いて衛生的であってほしかったという筆者も賛成したくなるような回答をしている。観察力・洞察力の深さの一端がうかがえる。

6. 「午後に廃棄物の最終処分場に行きましたが、どのような印象と感想を持ちましたか？」との質問の回答としては、(女1) 思っていた以上にニオイがキツかった。生ごみが発酵したニオイが充満していた。生ごみが多く、最終処分場に届けられているとは思わなかった。というのは、多くが家畜のえさやコンポストにされると思っていたからである。ウェストピッカーは思っていたより少ない印象だった。たくさん子どもたちがゴミ拾いをしていて思っていたが、見たのは十数名だった。(女2) ゴミの量、においが予想以上にひどかった。そのような環境の中をスリッパだけ、上半身は裸など、身軽な格好で歩いて回る人たちの健康状態がすごく気になる。また、医療廃棄物の処分場においてもそこで働く人々の衛生環境をもっと考え、改善させるべきだと思った。(女3) 予想以上にゴミの量が多かった。裸足でゴミを漁っている人や犬がいて身体への危険性をとても感じた。何かきちんと対策をたてる必要があると思う。数か月ですぐいっぱいになっていくので、ゴミをいかに出さないか、国全体の意識を変えることが大切だと思った。

(男1) 最初の臭いは強烈だったが、少しずつ慣れたように思う。しかし、環境はやはり過酷で、重機が動いているそばで、ウェストピッカーの人たちが歩き回っているのは非常に危険であると感じた。最初、聞いていたよりもウェストピッカーの数は少なく、多くの人が制服を着用し、NGOのもとで組織的に仕事をしているのには驚いた。写真で見る

と、実際に足を運んで五感で学ぶのとは違い、ダッカに来たからにはあの場所に行けたことは非常によかった。(男2) 第一印象としては、くさい、汚い、量の多さに驚いたといったものだった。トラックから生ごみを降ろす作業をする男性ですら、素手、サンダルという状態のままごみに触れてしまっているのを見て、衛生面でもっと改善の余地があるのではと思った。ごみを拾う人たちは年齢が様々だという印象を持った。最終処分場に入ることを許可されていないため、違法に侵入している形であるが、行政としてもその人たちが本当に生きていけなくなるとわかっているのに追い出せないというジレンマを感じた。ショベルカーが回って作業するすぐ近くでもゴミを拾っているところを見ると、危険でいつ事故が起こってもおかしくないなと思ったし、何とか別の仕事に就くことはできないものかと考えていた。(男3) まず、臭いがひどく、人がいれるような環境ではないと感じた。しかし、その中にwaste pickerがいて、ゴミを拾って生計をたてており、彼らは人間として扱われないようにさえ感じた。Waste pickerの人数は減ったというものの、問題は深刻であり、waste pickerが別の職で生計がたてられるよう、初等教育、そして職業訓練をするなどし、少なくともあの環境で生活させるべきではないと思った。また、ゴミの量も深刻な問題であり、この処分場も埋まってしまうので、早く、焼却処理などの技術、そしてそのための電力、エネルギーの供給が必要だと感じた。

解説: 上記から、有機廃棄物の腐敗臭のすごさや量に圧倒され、その後、ウェイトピッカーの労働環境の劣悪さを指摘、ゴミ処理の方法(排出源での減量化やコンポスト)などにテーマが移動しており、現場での観察を通してそれが衛生的な労働環境の保障や廃棄物管理の在り方などの政策関係に視点が移行していることは政策科学をある程度きちんと学んでいることが理解できる。余談であるが、案内役の青年海外協力隊員からここまで長くいた日本人は知らないと言われていた。また、臭いが全身に付着しており、よって、ホテルの入り口に入った途端、悪臭を消すためにスプレー式の芳香剤をおびただしく散布していた。

7. バングラデシュ研修を終えた北京の空港にて9月11日に行ったアンケートは直後の振り返りの性格のものである。「バングラデシュでの旅で最も楽しかったことは何ですか?」との質問の回答は、(女1) スラムの地域を回ったり、ゴミの山を見たりと日本では絶対に体験できないことを体験できたこと、(女2) コロニーの小学校でたくさんの子どもたちと触れ合い、子どもたちの笑顔が見ることができたこと、(女3) リキシャに乗ったこと。車すれすれのところを走り抜けるスリル感にとっても興奮した。

男子学生の場合、(男1) 人との触れ合い。先生(法学部三宅博之教授)の知り合いの方と多く会うことができたこと。何よりダカ大学の学生と一緒に出掛け、話をすることができた

のが一番楽しめた。(男2) Bangladesh人との交流。Bangladeshの人々は陽気で優しく、親しみやすかった。彼らにおもてなしを受け、ともに出かけ遊んだことが最も楽しかった。(男3) Bangladeshで暮らす人たちとの交流。Bangladesh人との交流だけでなく、青年海外協力隊の方々やJICAの方々、大使館で働く方々、日本にいただけでは決して交流できないような人たちと出会い、話を聞いたことです。

解説：女子学生は日本ではできないこと（スラム・ゴミの山見学、リキシャ乗車）の体験をあげている一方、男子学生は人々との交流（Bangladesh人やダカで働く日本人）をあげているのが特徴である。第1章第2節でみたように、この双方が現場に行くことの意義に相当している。

8. 研修旅行は楽しいことばかりでなく、時には辛い、苦しいと思うこともある。したがって、「Bangladeshの旅で最も辛かったことは何ですか？」との質問に対する回答は、(女1) 食べ物が合わなくてよく腹痛になったこと。(女2) Bangladeshの料理に体が慣れず、食べ物を口にするたびに腹痛になったこと。(女3) 車酔い。もともと酔いやすい体質であったが、Bangladeshの舗装されていないデコボコ道を走ることによって何回も車に酔い辛かった。

(男1) 渋滞。全く身動きがとれない時間が長く続き、さらにそれが毎日あったという点が辛かった。道路のコンディションや街中の空気も決して良いものではなく、ダカの大きな問題の一つだと思うので、改善してほしい。(男2) ひどい環境の中でも必死で生きる人々を見たこと。特にゴミの最終処分場でwaste pickingをしていた人々を見た時。人間が決して住むべき場所ではないと思ったし、そのような中で親を亡くした子どもがゴミ拾いで生計をたてていると思うと、心が痛んだ。(男3) 格差社会を実感したこと。家がなくて道で寝ている人、ゴミを拾って生活している人がいる一方で、車に乗ったり、ショッピングモールで買い物をして高層ビルで生活する人もいる。格差の大きさを実感した。

解説：女子学生は自らの体調の悪さをあげている一方、体調に全く異常をきたさなかった男子学生は貧困、非衛生などの状況下に置かれている他者が同じ空間・時間に存在することの認識、さらにはそれを改善することができない自らの無力感を辛いとらえている。途上国の旅での体調管理は非常に重要である。カレーは日本のものと異なり、非常に濃く（香辛料が盛りだくさん）、油を多量に使う。お客として呼ばれた際には満腹を通り越して苦痛に転嫁するぐらいの「おもてなし」がある。普段、食事量が少ない女子学生にとっては非常に辛い。どのように相手の善意を断るかそのスキルが問われる。それも初対面、年上の人からの善意である。ダカから農村地帯に向かう道路は道路拡張工事のため、アス

ファルトがはがされ、穴が数多くあいている状態だった。その中をゆっくりであるが、ミニバンは移動する。上下振動が激しく、車酔いをしやすい体質ならば、体調を崩して当然である。

9. ふりかえりとして、「この研修旅行を通して成長したと思いますか？」との質問に、はい：4人、いいえ：2人であった。「はい」との回答者に対して、「どのような点が成長しましたか？」の質問に対して、①各視察場所で現地の人から聞いた話やその場所の様子をノートにメモしたことで頭の中を整理しながら、過ごすことができた点。今回の旅は自分で考えて話したり、動いたりすることがあったので、日本語が通じない国で、たじたじではあるが、英語を使い、今までより行動することができるようになったと思う。まだ、英語に自信がなく、積極性に欠けているので下手でも話すことが成長につながるので、恐れずに話そうと思う。②初めて海外に行き、日本以外の文化を体験したり、日本とは違う食べ物を食べたりすることで体も心も旅に出る前よりたくましくなれたのではないかと思う。③今回の旅を通して様々な方々を出会い、刺激を受け、もっと志を高く持つようになろうと成長意欲をかきたてられたと思います。④途上国の環境でも意外と楽しく生活できる自分を知ることができた。しかし、自らの英語力の未熟さ、積極性の乏しさ、バングラデシュの学生の意識の高さを目のあたりにし、自分もこれから成長を続けなくてはならないと思いました。

解説：英語の語学力不足を認識する一方で、下手でも話す努力を行い、きちんと情報を書き留めた。いわば、観察や聴き取りといった調査能力を上達させることが少しでもできたわけである。また、日本とは異なる環境の途上国でも楽しく過ごせたことに新たな、たくましい自分を再発見している。これらは、教室の中では完結することではなく、フィールドワークの醍醐味・意義であろう。

10. 最後に、「バングラデシュへ再度訪問したいですか？」には、はい：6人、いいえ：0人となっている。

解説：体調が悪くなくても、英語が通じなくても、汚くても、全員が再度の訪問を望んでいる。男子学生は、4年生なので、ゼミツアーではなく、将来、一人でも来るという決意（海外勤務の仕事で訪れたい）であり、女子学生は今回とは異なった景色（オールド・ダカ探索、世界最大級のマングローブ林＝シュンドルボン）を訪れたり、さらには、自ら理解しつつある問題点を再度現場に来ることでもっと深く掘り下げたいとのことだった。これは、リピーターを作りあげることに連動しており、バングラデシュが持つ何気ない観光資源がいかに興味深いものなのかを示している。

むすびにかえて

本学法学部政策科学科は海外志向が弱く、グローバリゼーションの中でいかに外に目を向けさせるかということが課題になる。筆者は元来の専門が社会地理学であり、南アジアが対象であったので、南アジアには行き慣れている。継続してスタディ・ツアーを行っているが、韓国やインドネシアが主であった。バン格拉デシュは今回で3回目である。今回のスタディ・ツアーに参加した学生の価値変容を見るにあたり、次の3点を基準とした評価をする必要がある。*異文化についての情報をどれだけ正確に習得したか？ *異なる価値観を理解し、自己中心の発想からどれだけ脱却できたか？ *積極的に、かつ効果的にコミュニケーションできたか？であった。それに係る具体的な回答は本文に記した。結論として、まだ真相を把握するまでには達していないが、観察や聞き取りを通じてきちんとノートをとり、情報を忘れないようにと報告書を作成している。人々との交流を通じて自己中心の発想から他者への思いやりへと変化している。英語でのコミュニケーションはまだまだ苦手意識が克服できないものの、積極的に話し合い、交流を行っている。特に、アテンド役に回ってくれたダカ大学やバン格拉デシュ工科大学の学生たちとの交流はそうであった。

さらに、4カ月経た時点ですタディ・ツアーと自分自身をふりかえってもらった次のような回答にも国際理解度の高まりを確認し、その成長ぶりが見て取れる。ある男子学生は、「バングラデシュの発展はまだまだこれからということもあり、非常に興味深い点もいくつもあった。この滞在を経て、私はやはりいつか一度、途上国で仕事をしたいと強く思った。さらに、それも複数の国での滞在、勤務をしたい」「これらの国でその国の人々と共にチームワークを築きながら仕事をしていきたい」と当初の海外勤務への思いが確信に変わってきている。

他の男子学生は、「以前にもまして途上国や新興国への興味が増した」「元より途上国の水環境に関して興味があった私は、バングラデシュの劣悪な水環境を目の当たりにし、人々が病気や異臭に悩まされることがないように、これらの環境を変えていきたいと改めて思った」と言っている。この両者は就職してそのスキルを途上国の環境改善に役立てることに自らの将来を連動させている。他の男子学生は、国内に勤務場所が限定された金融機関に就職が決まっているので、将来、海外勤務はないが、途上国の発展する姿を感じ、非常に感動、よって、「就職活動をする前であれば、就職先が変わっていた。それだけ自分の見たことの無い、感じたことの無いものがたくさんあった」と言い、若者の就職先を左右するほどの魅力をバングラデシュが有していることが理解できる。女子学生は、一同、「興味が増したので、卒業論文は途上国関係を」題材にし、また、そのうちの二人は、将来、途上国にて就職、一人は具体的に「子供たちの教育にかかわる仕事をしたい」と思いを伝えている。

三宅博之

今回のスタディ・ツアーはゼミの年間計画の中に入れていたわけではなかった。したがって、事前学習の面では筆者の講義科目を受講、その中での知識しかなかった。今後は、年間計画の中に位置づけ、バングラデシュへの研修を行う必要がある。特に、バングラデシュは非常に興味深い国際理解の資料を提供してくれるからである。

[注記]

- 1 毎年、三宅ゼミでは一年生は韓国プサンに出かけ、国立韓国海洋大学国際学部の学生との合同セミナー及びその他のアクティビティを実施している。2009年9月に行った際に、日韓の参加学生に調査を行い、文書化したものが、三宅博之(2010年3月)「国際理解教育促進のための大学一年次における海外スタディ・ツアーの重要性とその効果—韓国・プサンへのスタディ・ツアーの取組みを事例にして—」『北九州市立大学法政論集』第37巻第4号である。そこでも記されているが、韓国を含むアジアの学習の留意点として重要な学習内容＝国際理解の内容は、*日本とアジア諸国との正しい歴史認識の涵養、*アジアの人々の生活や文化の理解と尊重、*蔑視と偏見、*排外意識の克服であり、上記の国際交流を通じて、実施以前は事実と異なる認識を有していたが、実施後にはそれはある程度是正されている。(三宅、2010:91)
- 2 写真家三井昌志氏のHPには、「ダッカはひどい街だった。ダスティーでノイジーでクレイジーだった。ダッカに一日いると目が痛くなり、二日目には喉に違和感を感じ、三日目になると原因不明の頭痛に襲われるようになった。嘘偽りのない本当の話である。」から始まる「たびそら 三方一両損」と題したダカの印象記には、警官まで仲裁に出て来たリクシャワラ(人力三輪車引き)との移動にあたってのトラブルの話が綴られている。<http://www.tabisora.com/travel/041.html> 2015年1月28日アクセス。

[引用文献]

- ・大島弘和・伊井直比呂 2012年6月:82-89 「ESD実践のための地域課題探求アプローチ～大阪府立北淀高校の成果と大阪ユネスコスクール＝ASPnet学校群の試み～」『国際理解教育』Vol.18
- ・<http://www.jsrs.go.jp/j-gjinzai/gaiyou.html> 2014年12月2日アクセス
- ・佐野正之・水落一朗・鈴木龍一 1995 『異文化理解のストラテジー』大修館書店
- ・湯本浩之 2010:2-19 「開発教育と持続可能な開発のための教育(ESD)」(特活)開発教育協会内ESD開発教育カリキュラム研究会編『開発教育で実践するESDカリキュラム～地域を掘り下げ、世界とつながる学びのデザイン～』学文社
- ・ジョセフ・B・コーネル著 吉田正人・辻淑子・品田みずほ訳 2009年 『ネイチャーゲーム』柏書房(改訂増補版7刷発行)
- ・藤原孝章・栗山丈弘 2014年6月:42-50 「スタディツアーにおけるプログラムづくり～『歩く旅』から『学ぶ旅への転換』」『国際理解教育』第20号

バングラデシュへのスタディ・ツアーを通しての学生の価値変容

- ・伊豫谷登士翁 1993 『変貌する世界都市～人口と人のグローバリゼーション』有斐閣
- ・山形辰史・村山真弓編 2015年1月：2-26 「特集 気がつけばバングラデシュ―芽吹く新産業―」『アジア研ワールド・トレンド』第21巻1号
- ・ <http://www.thedailystar.net/rising-population-big-concern-for-dhaka-33081> 2015年1月15日アクセス
- ・ <http://blog.livedoor.jp/yamusicnifty/archives/874428.html> 2015年1月26日アクセス
- ・ <http://www.rikkyo.ne.jp/~htanaka/01/Bengal05.html> 2014年12月29日アクセス